



2012年11月 初版（小学生の短歌教室 副読本）発行
2017年3月 第二版（改題）短歌を讀もう！短歌を作ろう！発行
2019年8月 第二版第二刷発行
編集・発行：群馬県立土屋文明記念文学館
協力：高崎市小学校国語主任委員 高崎市立上郊小学校
参考：今野寿美「作って楽しむ短歌」『讀んで楽しむわくわく短歌』

短歌を讀もう！短歌を作ろう！伝統的な言語文化に親しむ

短歌の五七五七七の三十一音を三十一文字と厚紙に切り取ります。はじめの五七五を「上の句」「下の句」といいます。後の七七を「下の句」といいます。五七五それぞれ「初句」「第二句」「第三句」「第四句」「結句」といいます。音の数がいろいろありますが「守り歌」「守り歌」「守り歌」が基本です。俳句と違い季語はありません。短歌一首は、下の句と上の句の間を空けたり行を変えたりしないでつなげて書くことが基本です。俳句と違い季語はありません。

土屋文明の短歌を讀む

群馬が生んだ歌人・土屋文明（一八九〇ー一九九〇）

土屋文明は、群馬県西群馬郡上郊村（今の群馬県高崎市保渡田町）に生まれ、「アララギ」という短歌のグループのリーダーとして活躍した歌人（短歌を作る人）です。日本で一番古い歌集（短歌などの歌を集めた本）である『万葉集』の研究も熱心に行いました。文化勲章を受章し、群馬県名誉県民になり、百歳まで長生きしました。



土屋文明（70歳頃）

県立文学館ホームページ「土屋文明ってこんな人！」を見ると、その人生がよく分かります。

短歌が一首だけで発表されることは、ほとんどありません。雑誌に数首から数十首ぐらいまとめて発表され、それが後で歌集にまとめられる場合がほとんどです。（マンガがはじめ雑誌に発表されて後で本になるのと似ています。）

歌集の中では、いくつかの短歌をまとめて、その前「詞書」と呼ばれる、状況を説明する言葉や文章が入ります。短歌には、一首だけ抜き出して讀む魅力もあれば、詞書、歌集といった単位でまとめて讀む魅力もあるのです。

特徴の1つは「一首を讀むとほろほろ泣いてしまう」

「小工場」酸素溶接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむひす

（つちひらひらひら）ななせなせひらひらめきたち すなまじいじつちやう なるひらひら（す）ーののの



【意味】小工場「酸素溶接」の光（ひら）かひらめきたち、砂町四十町は夜になりひらひらひらひら（す）。
※砂町は東京都東部の地名で、東京市城東区（現在の東京都江東区）にありました。その中の地名「四十町」「江東区東砂の丁目のあたりです。東京の下町の小さな工場で、金属を高い温度にして溶かしてつなぎあわせる」溶接（溶接）「作業をしているところ」を詠んだ短歌です。土屋文明には、いろいろとした工場などの機械的なものを詠んだ短歌があつて、これは当時、かなり新しいものだった。

1つの特徴は「一首を讀むとほろほろ泣いてしまう」

土屋文明の第九歌集『青春集』（一九六七年）の中で詞書「私注稿」に続く五首

『私注稿』という詞書は、文明が『万葉集私注』という本（全三十巻）の原稿を書き終えた」という意味です。『万葉集私注』は、万葉集について文明が自分の意見を述べた本です。



宝字三年注しを入らり今ぞ切る三年前のマンリ一本

（ほうじさんねん）ちゆうしおえたり いまぞきる さねねまへの まじらいっぽん（ご）ンノ一本

【意味】天平宝字三年（西暦では七五九年二月二日〜七六〇年二月二日）の歌「自分の意見を付け終わった。今こそ三年前に手に入れたマンリ産たはこの封を切って一本取おう。」

鉄ペンも得難き時に書き始め錆びてペンの感覚今に残れり

（てつぺんも）えがたきときにかきはじめ さびしべんのかんかか いまこのこれり（ご）ンノ一本

【意味】この「私注」は鉄ペン（ペン先が鉄でできた万年筆）を手に入れることが難しかった時に書き始めた。（新しいものを買えなかったので古びたペンで書き続けた。）その感覚が手に（今も残っています。）

浅葱の枯れて野びるはかじかまり唇が腰抜ける二月近づく

（あさぎの）かれてのびるは かじかまり あがしぬける にがぢかづく（ご）ンノ一本

【意味】浅葱の一種（アサギ）が枯れ、ノビル（ノビル）という植物が寒さでかじかんだようになり、私の腰が抜ける二月が近づいてく。

年々の足の立たなくなると二月恐れ冬をひらめくを買はず

（としとしの）あしたたなく なるにがつ おそれふゆの ひらめくをかわず（ご）ンノ一本

【意味】毎年足が立たなくなると二月が心配で、世話がひらめくなくなると買わず（冬をひらめく）（冬をひらめく）をかわす。

金柑の貝殻虫を落したり温かき日はただたのしくへん

（きんかんの）かいがらむしを おとしたり あたたかきひは ただたのしくへん（ご）ンノ一本

【意味】キンカンについたカイガラムシを落としたりして（温かき日はただたのしく）（冬をひらめく）



五首並べて讀んでみると、直接「私注」と関係があるのは最初の二首だけで、あとの三首は、同じ時期の他の二首を詠たいと思います。いろいろな歌を詠む流れの中での、まじりこみしての魅力を感じてもらいたいのです。

